

生徒の自主的活動による安心・安全な学校づくりと教頭の関わりについて

—「楽しく安全な学校づくりサミット」の取組をとおして—

鳥取県米子市公立学校教頭会 米子市立福生中学校 森 脇 宏

1 主題設定の理由

学校は、子供たち一人一人が学ぶ喜びを享受し、人生を開く生きる力を身に付ける場である。しかし、いじめや不登校、また、被虐待や貧困など家庭問題により学校不適応という形で苦しんでいる子供たちもいる。前提としての「誰もが楽しく通える学校」のため安心・安全の保障が何よりも大切である。そのため、安心できる集団作りや、自治の力が必要である。

いじめ防止対策推進法では、学校におけるいじめの防止として第15条に、「…いじめの防止に資する活動であって…児童等が自主的に行うものに対する支援…を講ずるものとする。」とあり、平成29年3月に改定された文科省『いじめ防止等のための基本的な方針』の中で学校が実施すべき施策の一つとして、学級活動、児童会・生徒会活動等において児童生徒が自らいじめの問題について考え、議論する活動の推進が示されている。

そこで、「誰もが楽しく通える学校」にするため、校内や校区連携でどう生徒の自主的活動を創り出していくのか、どう教頭として関わるのかを提案していきたい。

2 研究のねらい

「誰もが楽しく通える学校」を目指して生徒の自主的活動を創り出していくために、教頭として校内や校区連携でどう支援・計画・実行したのか、どういう視点が必要なのか、実践事例をもとに教頭の役割を整理・検証する。

3 研究の経過

各中学校区での生徒の自主的活動の実践事例や、米子市公立学校共通の取組「楽しく安全な学校づくりサミット」（以下「小中サミット」）で情報共有後の各学校の発展的な独自取組を検証する。また、今年度の新型コロナウイルス感

染症の中、どうこれまでの取組を継承し進展させていくのか考えていきたい。

4 研究の概要

(1) 生徒の自主的活動をネットワーク化

どの学校もやり方などに違いはあれ生徒会が中心となり自分たちの力で学校をよくしていこうという動きがあった。

米子市では、平成28年度から生徒たちの自治の力を生かしながら、いじめ問題の未然防止のため「つながる米子市児童会・生徒会楽しく安心な学校づくりプロジェクト」が始まった。市内各中学校区では小中合同リーダー研修会が開かれ、いじめ防止につながる「安心安全な学校づくり」について話し合い、その内容を各校に持ち帰り自主的活動に生かしている。また、夏休みに開催される「小中サミット」は、市内の小中学校の代表が集まり、情報交換や話し合いをしている。

(2) 各中学校（区）の取組

①安心安全への広がり

各中学校区でリーダー研修を実施している。この研修は、自分たちの取組を振り返り改善し、各中学校区で独自の取組がなされている。学校だけでなく、保護者や地域を巻き込んで安心安全な環境を作っていくため、地域のつながり作りから始めている校区もある。また、PTA人権部・広報部と共に情報モラルアンケートを実施し、この結果を生徒会中心に問題意識の共有、そして、保護者を含めたSNSに関する研修会、標語づくりへと広げている校区もある。いずれの校区も「いじめをなくし、安心安全に過ごせる学校」をテーマに取り組んでいる。

②安心安全への深まり

安心安全の広がりも大切ではあるが、子

供たちにとっては、居場所である学級が安心安全であることでより実感できると考える。そこで、各学級へフォーカスしていった例を紹介する。

5月に生徒総会で「いじめ撲滅宣言」を提案し、全校で承認を受けた。2学期には「いじめ撲滅週間」を設け各クラスで取組を行う予定であった。しかし「いじめ撲滅という言葉が、いじめがありそれをなくすというイメージで今の現状と違う、むしろいじめを生まない仲間の絆を作ろう。」という議論がでてきた。そこで「仲間づくり週間」という名に変え、生徒会から学級への取組へとつながっていった。

まずは、生徒会執行部が自分たちで各学級の中央委員に来てもらい模擬授業をした。その模擬授業を受け、参加した各学級中央委員の司会で学級活動を行った。そこには、生徒会執行部もオブザーバーとして参加した。学級活動では、学級の中の課題について話し合い、「仲間づくり週間」の目標づくりを行った。そして、1週間毎朝中央委員が今日の目標を設定し、終わりの会では班でのふり返りを行った。ある中央委員が「学級が変わった。」と伝えた。居場所である学級の安心安全の実感へとつながった取組であった。

背景には生徒会担当であるミドルリーダーの成長がある。2学期になり「小中サミット」をもっと何かにつなげたいという思いから教頭へ相談があり、助言をしながら企画委員会への提案となった。彼らの自主的な提案や他の先生方を巻き込みながらの活動は頼もしく感じた。

③今年度コロナ禍での取組

例年8月開催の「小中サミット」が新型コロナウイルス感染症のため中止とされた。しかし、夏休みに入り感染症が落ち着き、小中連携リーダー研など生徒の活動が規模を縮小して開催できるようになってきた。そこで、推進委員会（市教委や学校代表参加）で「これまで進めてきた取組を形を変えてでも継続することが重要」と判断し11月に中学校生徒代表による交流会を開

催することが決定した。

5 研究の成果と今後の課題

取組での共通した教頭の役割として、大きく3つのことがあげられる。

- ①関係者への日程調整
- ②生徒会ミドルリーダーへの助言
- ③学校だより・HP等での情報発信

〈今回の取組の成果〉

様々な取組で生徒達の落ち着いた姿が広がったことは確かである。それには、生徒会執行部をはじめとする生徒達とミドルリーダーの先生方が自主的に動き始めたからでもある。ただ、どう他の生徒や教員に理解してもらい動かしていくのかという助言は必要であると感じた。

- ・取組をHPで知らせることや地域や保護者を巻き込んでいくことで、最終的に登下校の安全やいざというときの防災体制にもつながるものと確信している。

〈今後の課題〉

- ・安心安全の取組を広げるだけではなく、生徒たちの居場所である学級での深まりも大切にしていかなければならない。このバランスが大切であり、教頭自身がビジョンを持っていないとミドルリーダーにやらせてみることも指導助言もできない。教頭が状況を見取り、見通しを持つなどの力量が必要である。
- ・時間確保のために、何をカットするのかだけでなく、育てたい資質能力を育成するために学級活動、総合的な学習の時間の編成を考えていく。同時に、話し合いの仕方を国語科、いじめ防止を道徳科など教科等横断的視点でカリキュラムをマネジメントしていきたい。
- ・生徒の安心安全のため、まず校内や校区小中学校での取組である。被虐待や貧困など家庭問題により学校不適応という形で苦しんでいる子供たちもいる。「誰もが楽しく通える学校」のため地域人材やSC、SSWなどの外部人材をどう活用し学校へ取り込んでいくのかも模索していきたい。